

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 田山花袋 『蒲団』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 72 回のツイキャス読書会の課題図書は、田山花袋 『蒲団』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

うまくいく恋なんて恋じゃない。

文中に出てくる、モウパッサンの「死よりも強し」は、独身の老画家が、長年不倫関係にあった夫人の娘に恋してしまい、結局その恋は叶わぬものと絶望し、最後は馬車へ身を投じてしまうという話だそう。

時雄もきっと、そんな死を選ぶほどの恋に憧れたのかもしれない、もしくは絶望に至る恋に恐怖を感じたのだろうか。結局その本は机の上に置かれたまま。

打ち明けられぬ気持ちをひた隠し、酒をあおって妻に当たる。こっそり芳子の部屋へ入って男からの手紙を読み、関係がはっきりしないから悶絶打つ。先にも後にも進めぬ男のありのままの欲望が切々と描かれていた。

正直すぎる独白の連続に、寄り添えない感情は出てくるけれど、切ない気持ちはわかる。

叶わぬ恋に泣く。

これは女の代名詞でなかったか。

恋せよ男子。

我が身の不甲斐なさに涙がこぼれるから文学が生まれる。

モウパッサンを調べていたら、彼が残した言葉にこんなものがあった。

(引用はじめ)

読者の気持ちは、笑わせてくれ、考えさせてくれ、泣かせてくれ、くすぐってくれ、などという種々雑多なものだから、小説家はそのどこかに、または全部に応じるように書くのだ。

(引用おわり)

「蒲団」は、笑わせてくれたし、泣かせてくれたし、時雄の鬱々とした感情に思わず女心をくすぐられた。

あとはこれから考えさせてもらおうと思う。

男の恋心がいかに正直で繊細かということ。乙女な男子が多い現代だからきっと参考になるはず。

(おわり)

『過渡期の痛み』

恋ではなく、情。芳子も時雄もお互いを愛したのではなく、お互いに憧れていただけではないかと思った。手に届きそうで届かない、師弟という関係。芳子は自分に欠けている文才を彼から求め、時雄は彼女から若さと垢ぬけた精神を求めた。お互いを自分の向上のための触媒として捉えただけで、心から愛してはいなかったのではない。

幼女に欲情する男の自己欺瞞と煩惱を書いた「ローリタ」という作品が思い浮かぶ小説だった。芳子を愛したいけど、諸事情を考えてなるべく心を抑えようとする時雄。でも彼が欲しがってたのは、妻とは違ってハイカラな、初々しい一人の処女であるのみで、芳子その本人ではない。口では、今様の女などと進歩的な話をするが、内心では彼女がハイカラが増すにつれて怪しからんと思うふしがある。妻や姉を時代遅れの女だと思っているのに、自分も時代遅れな考えにとらわれていることをちゃんと自覚していない。だから彼は自分の矛盾を合理化しようとした挙句、温情なる保護者という仮面をかぶって悩むことを止めてしまった。

芳子に好きな人ができたと聞いた時雄は苦い絶望を味わいながらも、その「温情なる保護者」の仮面を外そうとはしない。彼は結局、彼女の墮落をいやいやながらも実は期待していたのかもしれない。一種の人形として、彼女の動きや墮落を遠くで眺めながら、辛い喜びを感じたのかもしれない。

彼は彼女を手に入れようと努めた試しがない。たびたび描かれる彼の妄想も大したものではない。彼にはただ、彼の退屈を労わってくれそうな若い人形が必要だったのだ。彼女を完全に失った彼は彼女の匂いを嗅ぎながら慰安を乞おうとする卑屈な態度を示すだけである。

自分もこういう経験があるので、読みながらとても辛くてたまらなかった。なぜ行動に移さなかったのか、なぜ「温情なる保護者」という願ってもない鬱陶しい仮面をかぶり続けたのか、嘆かわしい限りである。が、これも恋の一つの形ではないかと思う。片思いはビターズweet。恋は甘い。

(おわり)

スミカズさんのツイキャスです。<https://ssl.twitcasting.tv/c:nindaranna>

『芳子という女』

蒲団をかぶって臭いをかぐなんて、少し嫌だなんて思いました。そんなことされていたら背筋がぞっとします。

女々しくて未練がましい所が男の人にはあるものなのかなと思いました。

面白いと思った所は、時雄の妄想シーンです。

とくに印象に残ったのは

(引用はじめ)

妻が無ければ、無論自分は芳子を貰ったに相違ない。芳子もまた喜んで自分の妻になったであろう。

(引用おわり)

違うかもしれませんが、私はホントにそうなのかな？と思いました。

芳子が喜んで妻になったのかな？

時雄の都合の良い妄想のように思いました。

芳子は先生を東京に出てくるためのツールにしたように感じました。先生に気があるくらいならまだまだ勉強中の身であるにもかかわらず、田中という青年と深い仲になったりするのかな？

女性は恋愛をしたら勉強や仕事がおろそかになるパターンが多くて、たぶん私もそうだと思うから、芳子が実家に帰されてしまうというのは仕方なかったのかな？ もし、芳子に才能があれば田中という青年が支えてあげてほしかったけど、昔だと今よりもっと難しい事なのかもしれないなと思いました。

でも、芳子はまたきつと帰ってきたいと思っていて、まだ夢を諦めていなかったとしたら良いなと思いました。

そのために、リボンとかをわざと置いていったとしたらたくましいな。

(おわり)

「時雄の自尊心」

時雄と彼の周囲の人々は、時雄の自尊心を何よりも大切にしている。
もし、それが打ち砕かれてしまったら、時雄の家庭や仕事が成り立たなくなってしまう。

時雄の自尊心は繊細だ。
彼が平凡な日常を送っている、ということだけでも傷ついてしまう。

若く艶やかな芳子が弟子となり、時雄は自尊心を高め、芳子に恋するようになる。
芳子との恋心を実らせる機会を得るが、時雄は行動しない。
彼は平凡を嫌っていると同時に、平和を愛しているからだ。
しかし、芳子に恋人ができてしまうという予想外な出来事が起き、彼は苦悩する。

酒を飲み、幼子に手を上げ、厠で倒れる。妻は時雄を甲斐甲斐しく世話をする。
時雄の自尊心を回復させるには他人の助けが必要不可欠だ。

時雄は、芳子と田中を応援し、東京に出てきた田中の仕事を世話しようと思った時もあった。
しかし、田中は要領を得ず、時雄の自尊心を高めてくれるような人物ではなかった。
だんだん、芳子と田中の関係が、時雄の自尊心にとって脅威になってきた。

時雄は、家庭では、酒を飲み、妻に八つ当たりした。仕事にも支障が出た。
時雄の妻と芳子は時雄の自尊心を傷つけないように気を使う。

しかし、芳子は時雄より田中を選ぶので、逆効果になってしまう。

追い詰められた時雄は、自分の自尊心を再び高めるために、芳子を東京に残し田中を京都に帰らせようと計画する。
だが、芳子の不貞がわかっただけで、時雄の自尊心を傷つけるだけだった。

ついに、芳子と田中は田舎に帰ることになった。

芳子をそばに置いておくことは叶わなかったが、時雄の自尊心への被害は食い止められた。
二人の若者の人生や未来を犠牲にしてでも、時雄の自尊心は尊重すべきものだった。
東京の隅の小さな村社会に、再び平和と秩序がもどった。

時雄は、私が以前勤めていた会社の、厄介な上司に似ている。自分は田中のような要領を得ない人間だったので、よく敵視されたものだった。

彼のような人が何を考えていたのか分かって良かったと思った。
(おわり)

「近代人ってどんなだろう」

大正末生まれの農村育ちの私の祖父母から聞かされた話によると、田舎の農家の子供達は兄弟が多く、皆家の手伝いや下の子達の面倒をよく見たそうだ。

田植えや稲刈りの時期になると学校を休んでその手伝いをさせられる。

戦中中国に出兵していた祖父は敗戦後復員して土木業と農業を営んでいたが、祖父が字を書いている姿を私はあまり見たことがない。

先進国で大量に安い製品を消費するために、途上国で安い賃金・劣悪な環境で子供も働かされている。

「親の決めた結婚を断った」とか「女子が学問をしている」という理由で殺人が行われる国・地域もいまだにある。

そういったことを考えれば、明治時代に相手の家柄がどうの、東京に出した子供を連れて帰るのは近所の目がどうのと言いはするものの、裕福な家庭に育ち、自由に学問をすること、それに伴い東京に出ることを許された芳子は随分と幸せな立場にあったと考えた。

それでも隠れて恋愛に溺れ時雄や父親を欺く形になってしまった芳子。

明治の女、近代人とはなんだろう、自由に学び、自由に道を選び、親が決めた相手ではなく自由に恋愛して自由にセックスができることが近代人なのだろうか？

欧米列強の圧力から開国し、文明開化、産業と軍事力を発展させ、欧米に対抗するため戦争をし何回かは勝ったけど、ずるずる続けた太平洋戦争で結局最後はアメリカに原爆を落とされ敗戦。

その後はアメリカの庇護のもと復興し生活水準は上がったけれど、頭の中身は、心の中身は欧米人にもなれず、さりとして日本古来の考え方なんてもうわからない。

なんてことをこの作品を読み終えて考えました。

芳子に対しては自由もいいけど、自分を大事にしてあげないと。特に女の子は簡単に体を許しちゃだめだよ、と自分を棚に上げて思った次第。

時雄に対しては、目の前の奥さんに愛されるよう、まずはあなたが奥様を愛してみたいはいかがですか？ とこれまた自分を棚に上げて思った次第です。

ブッダが言ったように愛することで憂いが生じる、苦しみが生まれるということがこの作品を読んで改めてよくわかりました。

(おわり)

「被害者は誰？」

私は、今回この話を YouTube で一度聞き、その後、青空文庫の文章を読んでこの感想文を書き上げた。感想は始めと後でガラリと変わった。

この話は、時雄という名の主人公の恋の告白物語である。始め、YouTube で聞いた時、私は彼の自己中心的な考え方に、とても腹が立った。特に女性に対する考え方にである。彼は、妻が子供中心の生活になり、自分を構わなくなった時、寂しくて孤独だという理由で、新しい恋を求めた。そこには、妻や子に対する思いやりは見られない。また、女性の価値を外見で決めている。恋した芳子が才女でも不美人だったらこの恋物語は始まらなかっただろう。そして、文学を志すハイカラな女性は立派だと言うわりに、心の中では、自分にかしづく古風な女性を求めていた。私は、彼はウソつきだなあと思った。さらに、芳子に振られると、「私には監督の責任がある」と言って嫉妬や怨みを隠し、彼女の味方を装って彼女を自分の物にしようと考えた。その浅ましさに、私は、彼の人間性を疑った。これらの理由から、「人生を狂わされてしまった芳子は気の毒だ。時雄の被害者だ。」というのが、最初の私の感想だった。

しかしその後、一応感想を確かめるため青空文庫の文章を読んで、私は、しまった！ と思った。自分の感想が怪しいものに変化した。

私が感想を変えた理由は、芳子と恋人の田中が関係した時期の解釈である。文中で、父親が「二人は神戸女学院時代に知り合った」と時雄に話している。つまり、時雄に手紙を送ってくる前である。もし、その時既に二人は関係ができていて、将来の生活も計画していたとしたら、この話は全く違う話となる。私は、芳子が弟子にしてくれと何度も崇拜な手紙を送ったのは、もうその時、田中が宗教家になる道は閉ざされていて、父親から田中と縁を切るように言われて、それを逃れるためだったのではないかと考えた。彼女は父親に縁を切るため東京に出ると言って騙し本当は、田中のために東京での生活の下調べをしに来たのではないかと考えた。そうだとすれば、1年以上前に彼女が夜遅くまで男の人といたという小母の話も、男は田中であつたと合点が尽くし、彼女が気のあるそぶりを時雄に見せたのも、ここにいないと計画が進まずに困るという必要性から行った演技だったと理解できる。時雄も、文中で「芳子は昔の女性と違い、感情を表に出さない。」と述べている。彼女は田中との将来のため、したたかに演技していたのだと思う。

上京後も二人は時々東京で会って相談していたに違いない。父親も、二人の計画には騙されたようだが、彼も時雄を騙している。計画に気付いた父親は、芳子を何としても家に連れ戻そうと考えたに違いない。そこで彼は、田中が宗教家にもうなれないことを知っただけで田中に卒業まで待つと言い、何も知らない時雄を味方につけてまんまと芳子を連れ帰ることに成功した。また、時雄の妻も真実を彼女から聞いていた節がある。別れの時二人は、しっかりと手を握り合い、友情を見せている。

もし、私の想像が真実なら、結局のところ、真実に気づかずに最後まで騙されたのは時雄であり、憐れな被害者は彼の方だった。

(おわり)

『狂おしい』

時雄は、芳子にまつわる様々な自分の気持を受け止め、もたえ苦しみ、それでもとりあえずの方向性を整えてやってきた。自分の本能に従えば行く末はどうか、想像力を働かせ、「師匠」の看板を懸命に守った。その過程のあまりの身悶えように読んでいる私が恥ずかしくなる場面もあったけれど、自分の気持に真っ直ぐな人だと思った。

芳子は、時雄が好きだったのだと思う。肉欲と闘っていたのは芳子も同じで、時雄から求められたら拒んでいなかっただろう。むしろ、時雄を最初に捧げる相手にしたかったのではないか。けれど、時雄と結ばれることは師弟関係である以上(先生にとって)あり得ない。頭痛も薬も増える一方。そんな折に出会った田中は、すぐに自分の手の中に入ることが分かった。自分のコントロールの対象に的を定め、あえて身を任せたとこ、もう離れがたくなってしまった。そんな感じなのだろうか。

頭の中の葛藤を抱える時雄、芳子、田中は、終盤登場してきた芳子の父によって現実に引き戻された。時雄の、「師弟関係」という社会的関係と煩惱との間に揺れ動いた日々が、案外あっけなく幕を閉じることになる。芳子の父は強い「世間」がバックにある人だ。「父親」という大義名分のもと、芳子の父が一番冷静で、3者の結論を意のままにしたのだ。頭の中の世界は、「世間」にこうも脆いのか、と感じた。

誰かを好きになるという感情は、いくつになっても捨てられない。あの人がいってくれるから私が居れる。その気持ちのぶら下がり感、何にも代えがたく心地よい。いつまでもこの心地よさを維持するには、心の中の世界を決して現実の世界で満たそうとしないことだ。勝手に心の中で溺れていたらいいい。溺れることもまた生きる目的なのだと思うから。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

「嗚呼、余計者にもなれず市井の片隅に」

性欲と道徳のジレンマの問題が、急に明治に現れた。世間の価値観との政治的といえる闘争である。もっと進めば、やがて社会主義革命運動になる。明治の文学史によれば、自由民権運動に挫折し、政治をあきらめた人々が、自然主義の文学運動に流れ着いたという。この中年作家は、世間に所帯を持って、市井の片隅に生悟りの道徳的作家として、慎ましく生きていた。彼は、とっくに政治問題から、逃げていた。しかし、芳子への恋愛を通して、遅ればせながら、政治問題のようなものに巻き込まれた。

竹中時雄には、立場があるので、自分の恋は世間に隠さなければならない。女弟子を情人にしたいという道徳上のジレンマがどんどん明らかになる。

時雄は自分の嫉妬を抑え込むために、芳子と田中の関係が清廉潔白なものだと信じようとしていた。自己欺瞞もいところだ、監督者として保護者として、さらには新時代の若者の理解者としての役割を演じながら、暗い情念と必死に戦っていた。

泥鴨(汚いあひる)のように酔って、便所に倒れ込んで、庭の雨をじっと眺める鋭い眼差しは、人間の最奥にある暗い情念を見つめていたのである。

エロスとタナトス。女弟子と一線を越えるか否かは畢竟、政治的な決断と同じなのだ。意志が問われているのだ。

意志は現象の没落の核心である。不倫で身を滅ぼせるほどの情熱があれば、時雄にも意志の核心があったことにある。

田中と芳子の二人は、情熱的に没落した。だが、蒲団を嗅いで泣いた時雄には、没落さえも許されていなかった。

女の残したパジャマや蒲団の臭いに、中年男が咽び泣くのはみっともないが、こんな羞恥しか彼には許されてはいない。時雄の苦悶が痛いほどわかる。没落できない苦悶。意志の欠如。一線を踏み越えることは、世間の中の自分の場所を、自分で葬り去ることだ。

余計者らしく、惑溺の上に、家庭を捨てて、頓死することもない時雄には、芯のない人生の茫漠が残されている。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343